Fate/Sprits Team

ふぇるみん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

身体不可に耐えきれずに死んだ三人。だが、このままでは終わらない。

今、世界の人理をかけた冒険が始まる。

（・ω・）はいすいません、これデアラの続編（予定のもの）です。基本的に自分がやってたＦＧＯの追憶をめぐる形式でいきまーす。

というわけで引き継ぎ主人公は三人だけ。ただし原作主人公は開幕退場。良いね？

※この小説は本当に気まぐれで書きます。なので基本前作が終わらない限りこの物語は続きは見れないとお考えください。

目次

第１節　追憶の始まり　1
第２節　精霊召喚　7
第３節　燃ゆる空に災厄は降臨す　14
第４節　蘇りし紫の大剣　17
第５節　精霊、冬木を救う？　25
第６節　セフィロトとソロモン　32
第７節　その縁は地よりも深く　39
第８節　シスターズ、降臨　46
第９節　ぐらんどおーだー？　53
第１０節　開幕、オルレアン　62
第１１節　わかってはいたインフレーション　67
第１２節　魔女ＶＳ悪魔　71
第１３節　復讐者は闇に舞う　75

第1節　追憶の始まり

それは、遥か昔の事である。

２０１４年、三人の少女はこの世での生を終えた。
曰く、一人は身体の不可に耐えきれず。
曰く、一人は彼女の後を追うかのように。
曰く、一人は目的を果たして消滅し。
己が道を少なからず全うした彼女等は本来ならば今度こそ天に昇る。そうあるべきだったのだ。

だが。

「・・・・・あれ、ここは・・・・・。」

良く来たね・・・・ 世界の英雄・・・・・ いや、【黄泉の騎士】と言うべきかな？

「その呼び名を知っている・・・・ 何のためにここに呼び寄せた？」

何、ちょっとした用事でね。端的に言わせてもらおう。今の時刻は２０１６年。来年の２０１７年、君の大好きだったヴィンセント、ましてや人類はその存在を否定される。

「・・・・・!?」

その顔は・・・・ そんな結末なぞ絶対に否定する、といった顔だね。いいとも、君にはそのチャンスがある。

「チャンス・・・・・・？」

ああ、この後転生してもらう場所を含め世界を回り人類が存在できなくなる理由・・・・ いわば【特異点】に赴き、それを解決してもらう。それがチャンスだ。無論、受けるならそれ相応のデメリットは負ってもらうことになるが。

「・・・・もし受けるとしたら？」

君はこれ以前の記憶を全て失ってからもう一度現界してもらうことになる。そう、君の大好きな天使でさえも、君の愛した妹でさえも、そして、君が生涯愛し合った恋人も。

「・・・・・なら、このまま死ぬよ。受けて記憶を失うなら、このまま

覚えておいたままお兄ちゃんたちを待つ方がマシだよ。」

・・・なぜ、そうまでして自分の記憶にこだわる。死した以上、無意味。意味を為さないこの戦いに何を見いだそうと言うのか。

「それが、私とお兄ちゃんとの契約だからね。【死して尚、孤高永光に愛し合う】って。」

・・・・・・・・・良かろう、二人までなら道連れにしてやる。

「・・・・そう、なら。私の考えてることは分かるよね？」

・・・・・行け、待ち望んでいるものは己で掴みとるがいい。

「・・・・一つ聞いていい？・・・・・このお願いの報酬、聞かせて？」

・・・・お前の中にある願い、それを叶えるとしよう。

「・・・・その言葉、忘れないよ。」

この日、一人の少女が地上へと降り立った。しかしそれは、果て亡き理想を探し求める旅の始まりにすぎなかった。

「・・・・・・・。」

（・・・無事、降りられたのかｎ・・・・ってあれ!?何で私閉じ込められてるの!?）

開幕早々叫ぶこの少女。時に狂い、時に戦い、時に甘えたこの少女。幾ばくの時を過ぎた彼女は持ち前の実力で閉じ込められていた何かから脱出すると現在地を把握するため外に出る。

「・・・・これって・・・・。」

すると自分の足元に光輝く二つのグラスみたいなものとＵＳＢメモリー、そして装飾が施された短銃と歩兵銃がおかれていた。変な書き置きと共に。少女はそれを見ると丁寧に抜き取りそれを読む。

【その手紙を取っているということは無事に行けたようだな。その銃とメモリーは触媒だ。仲間を呼び出す際に使うといい。其とそのグラスは呼び出したらすぐに使うこと。そうすることで存在を永遠のものにできる。それでは、貴女の旅が幸福であらんことを。】

それを読み終えた途端その手紙は燃え尽きただの灰になった。少

女はそれらを抱えるとこの見覚えのある部屋から出ていった。

　そのころ、とある観測室では異常事態が起きていた。
「４８人目のマスター、及びサーヴァント、共に魔力回路断絶、通信不可です!!」
「霊基反応消滅を確認・・・　生命反応途絶・・・・・。」
「・・・・そんな、あの特異点で何が起こっているんだ・・・・!!」
　次々と告げられる無情な報告、そこに男は立ち尽くし、呆然としていた。事前に予測できなかった敵の出現、その実力差、その個体数、その未確認の敵は最後のマスターである藤丸立香を屠り、あまたも堅牢な壁で防いでいたサーヴァント【マシュ・キリエライト】を一瞬にして葬り去った。それを見ていたのだ。少女は不安げにそれを見ていた。

（・・・・本当に不味いことになってるのね。本気出していかなきゃ。）
　そう思考した少女は意を決して前に進む。
「どうやら、お困りみたいだね？」
「「!?!?」」
　不意に出てきた少女に全員がそちらを向く。
「・・・・・一体何処から・・・・!?」

「私は召喚システムによって世界の人理を・・・　いや、過去の私を存続させるために呼び出された４９人目のマスター、というべきかな。」
「・・・・・何者なんだい？君は。」
「・・・ふふ、クラスはエクストラ。真名はクロエ・クローチェ。黄泉を司るヨハネの騎士よ。」

ここに、全ては始まった。

第2節　精霊召喚

　目の前にいる少女・・・・　クロエがそう告げた途端、現場にいた全員は騒然とした。
「ヨハネの四騎士だって!?それはドイツの有名な神話に出てくる騎士達!?」
「とにかく、多分あいつらはまだ生きてると思いますよ。」
「!?それは本当か!?」
「えぇ、取り敢えず助けに行くにはサーヴァントを呼び出さないと・・・・。」
「え、君がサーヴァントじゃ・・・・。」
　目の前にいる男・・・【ロマニ】がクロエに向かってそう呟くがクロエは首をブンブン横に振り、
「サーヴァントと言っても名ばかりよ。やれることと言ったら暴走したり狂化したり特攻全体宝具数分単位でブッパ出来るくらいよ?」
「「既におかしい!?」」
　二人が驚いている中、クロエは触媒となる短銃をその場においていた。
「それが触媒かい?」
「エエそうです。それも、ＥＸクラスの触媒をね！」
　クロエが言い終えたとたん、とてつもない光と共に触媒が光輝き辺りを包み込んでいく。しばらくして三人が覗くと、そこには二人の少女がいた。
「あらあら、私を呼んだのは貴方ですの?」
「随分と生意気な子ね?」
「あれ、なんかおまけまで付いてる。まあ、呼び出されたからには、手伝ってもらうよ?」
「それは分かっておりますわ、クラスはアーチャー・・・・　さしずめ、天宮のアーチャーとでもお呼びくださいまし。」
「全く・・・　私はランサーで良いわ、天宮のランサーとでも読んでちょうだい。」

「オッケー、ナイトメアとイフリートね。」
「「なんで!?」」
　さらりとクロエがかわしていったのを二人して驚くアーチャーとランサー。そしてその光景に冷や汗を隠せないダ・ヴィンチとロマニの二人。
「そんな流れのノリでやっても冷静な私には無駄なんだからね？【狂三】、【琴里】。」
「あちゃー、台無しじゃない。」
「雰囲気を削ぐのがあなたの唯一の嫌なところですわね？」
「ペイル呼ぼうか？」
「「いいえ全力で遠慮させていただきます（わ）。」」
　そんな他愛のない会話をしているとダ・ヴィンチが会話に割って入ってきた。
「さて、君たちの解析が終わったから言うね。直感的な感想を言うね。君たちなんなのこれ。」
　クロエはダ・ヴィンチに見せられた解析資料をみてあぁ・・・・と納得していた。

以下二人の資料
クラス　アーチャー・アサシン
真名【時崎狂三】
ＨＰ　２０４２７
ＡＴＫ　１３７４９
筋力：Ｄ
耐久：Ｂ
敏捷：ＥＸ
魔力：ＥＸ
幸運：Ｃ
宝具：ＥＸ
所属　中立・悪
性質　星

保有スキル
時喰みの城　ＥＸ　チャージ　８～６
・敵のチャージを確定で１～３減らす。減らした量に応じて自身のＡＴＫ・Ａｔｓ・宝具威力・オーバーチャージ段階をアップ（Ｌｖ１０【３回・５ターン】）
援護射撃　Ａ　チャージ　６～４
・敵単体に対して１０００～５０００ダメージ＆ＤＥＦ・ＡＴＫをダウン（Ｌｖ１０・１ターン）
最悪の悪夢　ＥＸ　チャージ　１０～８
・敵全体に恐怖状態（７０％・２ターン）＆呪い状態（３０００ダメージ・１０ターン）を付与。恐怖状態がスタンへと進行した場合、自身に対スタン特効状態を付与（１ターン）

保有クラススキル
単独行動　ＥＸ
・攻撃時の与ダメアップ＆クリティカル率アップ
悪夢　Ｂ
・攻撃時、低確率で呪い状態（１５００ダメージ・５ターン）を付与する状態を追加
神威霊装・三番　ＥＸ
・自身の防御力が上昇、ガッツ状態（１回）を付与。
時の精霊　ＥＸ
・自身のＡｔｓ性能、ＡＴＫ、与ダメ、防御力をアップ。被ダメージをカット（４０００ダメージ）。一定確率（４０％）でスキルチャージを１進行させる。

宝具　刻々帝　Ａｔｓ宝具
・自身のＡＴＫ、Ａｔｓ、宝具威力アップ（オーバーチャージで上昇率アップ（３ターン））＆敵全体に超強力な【人型・サーヴァント】特攻攻撃＆スタン状態を確率で付与（６０％・２ターン）。スキル

チャージを確定で1進行させる。

コマンドカード
Ｂｕｓｔｅｒ
Ａｔｓ
Ａｔｓ
Ａｔｓ
Ｑｕｉｃｋ

クラス　ランサー・バーサーカー（アーチャーのみ防御有利・与ダメ４倍、セイバーからの被ダメージ４倍・与ダメ等倍）
真名【五河琴里】
ＨＰ　２２５８８
ＡＴＫ　１９４２０
筋力：Ａ＋
耐久：ＥＸ
敏捷：Ｃ
魔力：ＥＸ
幸運：Ｂ
宝具：ＥＸ
所属　中立・善
性質　星

保有スキル
霊力解放　ＥＸ　チャージ　６～４
・自身のＢｕｓｔｅｒとＡＴＫをアップ（Ｌｖ１０・１ターン）
ヒーリング・ファイア　ＥＸ　チャージ　５～３
・自身に毎ターンＨＰ回復（２０００）＆ＮＰ獲得（１６％）を付与（３ターン）
炎の少女　ＥＸ　チャージ　８～６
・被弾時敵にやけど状態を付与（３ターン・１５００ダメージ）＆

攻撃時やけど状態を付与（３ターン・１０００ダメージ）＆使用時、ランダムにクラスと宝具を変更する。
「ランサーの場合、宝具が【灼爛殲鬼・戦斧】に変更。クラス属性はランサーに準ずる。
「バーサーカーの場合、宝具が【灼爛殲鬼・砲】に変更。クラス属性はバーサーカーに準ずる。
「ランサー・バーサーカーの場合、宝具が【灼爛殲鬼・黒刻】に変更。クラス属性はセイバーに対して被ダメージ４倍、アーチャーに対して与ダメ、被ダメ等倍。

保有クラススキル
単独行動　ＥＸ
・攻撃時の与ダメアップ＆クリティカル率アップ
司令官　Ａ＋
・味方全体の攻撃力を少しアップ
神威霊装・五番　ＥＸ
・自身の防御力をアップ＆毎ターンガッツ状態（１回）を付与
炎の精霊　ＥＸ
・自身のＢｕｓｔｅｒの威力をアップ＆毎ターンＨＰを回復（５００）

宝具　ランサー時　灼爛殲鬼・戦斧　Ｑｕｉｃｋ
・敵単体に超強力な【やけど】特攻攻撃（オーバーチャージで効果がアップ）＆自身のＨＰを２５００回復＆一定確率でスタン（５％）
バーサーカー時　灼爛殲鬼・砲　Ｂｕｓｔｅｒ
・敵全体に超強力な【やけど】特攻攻撃＆全体にやけど状態を付与（５０００ダメージ・１０ターン（オーバーチャージ一段階毎に１０００ダメージずつ上昇））＆自身の弱体を解除＆相性不利を打ち消す（５ターン・解除不可）
ランサー・バーサーカー時　灼爛殲鬼・黒刻　Ａｔｓ
・場の状態を【業火】状態にする＆味方に【業火無効】を付与＆味

方全体に【毎ターンＮＰ獲得状態】を付与

コマンドカード
ランサー時
Ｂｕｓｔｅｒ
Ｑｕｉｃｋ
Ｑｕｉｃｋ
Ａｔｓ
Ａｔｓ
バーサーカー時
Ｂｕｓｔｅｒ
Ｂｕｓｔｅｒ
Ｑｕｉｃｋ
Ａｔｓ
Ａｔｓ
ランサー・バーサーカー時
Ｂｕｓｔｅｒ
Ａｔｓ
Ａｔｓ
Ａｔｓ
Ｑｕｉｃｋ

この資料を見たクロエは二人をジト目で見ていた。
「なんなのこのチートさ……　相変わらず精霊の力は健在みたいね……。」
「あなたがそれ言う？」
「まだペイちゃん呼んでないからノーカン!!!」
「はいはい……　で、そこのお二人さんが？」
「うん、私たちがいなくなって直ぐ後に起きる人類焼却とやらを止めようとしているダ・ヴィンチちゃんとロマニさん。」

「ふぅん、まあいいですわ。今は一刻を争うのでしょう？速くその特異点とやらに送ってくださいまし。」
　狂三はそう言い自身の相棒である二丁の銃を掲げる。
「ああ、来て早々にすまないが頼む。今ここにいる君たちが最後の希望だ。」
「分かってます。お兄ちゃんをここに呼び出すためにも人里を救って見せます!!!」

　そしてここに、既に居ない４８人目のマスターを救うべく、否、この特異点を正しくすべく三人のサーヴァント・・・・　いや、精霊が飛び込んだ。
　Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・・・

第3節　燃ゆる空に災厄は降臨す

「はっはっは・・・・ ロマン・・・・ ここ、空だよね？」
『座標をミスってしまったみたいだ・・・・・・・。』
「もおおおおお!!!」
　絶賛落下中のクロエ達三人組。あの後レイシフトを強引に敢行し冬木と呼ばれる場所に飛ばされた三人はロマンのミスにより空からの登場となっていた。
「もう、仕方無いわね・・・・ 【神威霊装・五番】！」
　落ちるクロエを霊装を展開して浮かび落下を止めた琴里。因みに狂三はさらっと【神威霊装・三番】を纏って着地していたりする。
「ふう、これで初手死亡はなくなったわね。それにしても荒れ果ててるわね・・・・。」
「まるで戦争が起きたかのような荒れ具合ですわ。」
「取り敢えず、現状確認だね。」
　三人が降り立った地は既に燃えており辺り一面は荒廃している。ひとまずクロエは状況を報告するため通信をとった。
「此方クロエ、何とかレイシフトはうまくいきました・・・・ 取り敢えずロマンは後で狂三に寿命食ってもらうとして・・・・。」
『平然と殺害予告された!?』
「そりゃわたくし達の恩人を一瞬殺しかけたんでギルティですわよ？」
　平然とキレる二人を何とか押さえようとする琴里。それもあってかなんとか二人はロマンに対して矛を納めた。
「いきなり殺害予告なんてボクでも初めてだよ・・・・。 それで、マスターである立香君が消えた反応はこの先だ。」
　通信の声を聞きクロエはその先を見つめた。だがあるのは崩落した建物と・・・・・。
「クロエさん、あれって・・・・・。」
「ロマンさん、あれって見えます？熱源反応で補足できるものとか。」
『ちょっと待ってね・・・・・ ああ、あるね。それもよっつ。』

「多分それ探してた人達じゃないんですか？まあ念のため武装はしますけど。」
　クロエはその熱源に近づき、
「どうも、あなた達が最後のマスターさん？」
「うわあっ!?」
「ちょ、何よあんた達!?」
　突然声をかけられたら反応もこうなるであろう。しかしそれを遮ったのは、
『所長!!』
「ロマニ!?通信が繋がらなくて困っていたのよ!?」
『こっちだって生体反応が途絶えて必死で探してたんですよ!?』
　通信越しに対話している所長と言う人とロマン。それを尻目にクロエは狂三と琴里を引き連れ、
「貴方が人類最後のマスターでいいのかな？」
「え、ええ。」
「私は４９人目のマスターこと、クロエ・クローチェ。一応サーヴァントだけど今はマスターとしてやってるよ。そして、後ろにいる二人が。」
「クラスはアーチャー、時崎狂三ですわ。」
「バーサーカー・ランサーの五河琴里よ。ま、宜しくね。」
「私は藤丸立香。クロエちゃんが言ってたように最後のマスター？なのかな。」
「そうなりますね。あ、私はマシュ・キリエライトと言います。今は訳あってサーヴァントになってます。」
「よし、ひとまず目的は達成できたわけだけど・・・・。所長？だっけ。」
　既に通信に一区切りがついていた所長に向かってクロエが声をかけると所長は振り向き、
「貴方にも聞きたいことはあるけど、取り敢えずなんでしょう？」
「今のこの現状、もしくは私たちが合流するまでの間に起きていた生体反応の途絶。何があったか分かりますか？」
　クロエが知りたかった一番の事実。所長は少し考えると、

「おそらくは今までの戦闘で何らかの衝撃が通信機器に加わりそれで壊れたんだと思うわ。」
「そうですか・・・・。」
「それじゃ、こっちからも聞くわね。あなた達が来る前、シャドウサーヴァント・・・・ いわゆる残留思念と思われるものと戦闘して、これを手に入れたの。」
　そう言って懐から何かを取り出した。クロエはそれを見て目を丸くし叫んだ。
「・・・・これって・・・・!?狂三ちゃん!琴里ちゃん!」
　クロエの呼ぶ声を聞いて狂三達がやって来た。クロエは二人に所長が持ってるものを見せた。すると二人も案の定同じ反応を示した。
「しょ、所長さん!!これ今すぐにどうにかして召喚の触媒にして!!」
「ちょ、琴里さん!?ど、どういうことよ?」
「それ、私たちの仲間の心臓です!」
「ええっ!?」
　いきなりの衝撃発言に固まる所長。そして驚く精霊二人。さらにこの発言に訳もわからずポカンとしている立香とマシュ。
「ドクター!この辺りに霊脈は!」
『ここを少し行ったところにあるよ!』
「分かったわ。走るわよ!ついてきてちょうだい!」
　所長が走り出しながら言ったそれを聞き逃さなかった全員は霊脈ポイントまで一直線に走り始めた。
　Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・・
「」

第４節　蘇りし紫の大剣

　霊脈へと無事たどり着いたマスター＋精霊一行。その手には紫に輝く霊結晶。
「これを触媒にして召喚すればいいのね？」
「ええ、そうです。ですが、おそらくあちらの方から来てくれるんじゃないんですかね？」
「？あの……。」
「琴里で良いわよ。」
「あ、はい。では琴里さん。さっき言ってたことって一体……。」
　気になっていたマシュがそれを口にする。琴里はああ、といった表情で頷く。
「あの子は私達とは一番縁が深いのよ。だからこちらから呼応に応じて貰わずともあちらから来てくれるだろうってこと。それぐらい私達はあの子のことを信じてるから。」
　琴里がそう喋っていると。
「マシュ、召喚の準備を！」
「あ、はい！」
「さて、いよいよね……。」
「うん、一応懸念すべき事項は有るんだけどね。」
「【反転体】の事ね。まあ霊結晶は純粋な色だし心配はないと思うけど……。」
　二人が懸念する中、それはいよいよ始まった。
　霊脈のエネルギーが収束する地帯に設置された召喚媒体ことマシュのシールド。その中央に置かれたのは純粋な紫に光る霊結晶。置かれた霊結晶はまるで霊脈のエネルギーを吸収するかのごとく膨大し瞬時、３本の光があたりを照らした、
『霊基反応！【セイバー】!!』
「予想通り！」
『ん……？待って、もう一基反応！』
「「あっ……。」」

『反応解析……【セイバー・アルターエゴ】!?』
　ロマンの狼狽えように琴里を睨むクロエと狂三。
「フラグの責任、とってくださいまし。」
「でもなんとなく来そうな予感はしてた、霊結晶があるってことはその記憶を縁にして来そうだなーとは思ったし。」
「はぁ……　まずはナヘマーを止めないとね。」
　そう言ってる合間にも光は強く輝き……　そして勢い良く爆発した。

「・・・・・・お前・・・　か。我を呼んだのは・・・・　なら、去ね!!」
「眠りから覚めて私は気分が頗る悪い・・・・・　故に死んで尽んで往に尽くせ!!」
「やっぱりおこでしたわね!?」
「天香ちゃん十香ちゃんステェイ!!!!!」
　召喚した瞬間殺害予告の二人をクロエは慌てて止めた。二人は剣先をその声のする方に向けて・・・・・・　見慣れた顔を見たのか剣先を下ろす。
「おお、琴里にクロエではないか。」
「それに貴様は・・・・　時崎狂三か・・・・・・。▪」
「ふう▪・・・・　あいかわらず二人はもう少し回り見てから剣向けよ?」
　クロエは総二人に呟くと立香達の方に向くと、
「紹介するね。天宮のセイバーこと【夜刀神十香】ちゃんとその絶望した側面体こと【夜刀神天香】ちゃんだよ。まさかここにも落ちてるとは思わなかったけど・・・・　恐らく二人以外にもいるかな、霊結晶状態でここに来た子たちが。」

「その■……　味方で良いんですよね？」
「ええ、安心していいわ。二人は私達の仲間よ。」
『簡易解析結果が出たよ！相変わらずどうなってるんだろうねぇ！』

そう言って結果データを全員に送信した。

クラス　セイバー
真名【夜刀神十香】
ＨＰ　１８４１０
ＡＴＫ　１４８１０
筋力：ＥＸ
耐久：Ａ＋
敏捷：Ａ
魔力：ＥＸ
幸運：Ｂ
宝具：ＥＸ
所属　中立・善
性質　星

保有スキル
・霊力開放（秩序）　Ａ＋　ＣＴ　４
自身のＢｕｓｔｅｒ性能をアップ（１Ｔ）＆スター獲得率アップ（２０％／３回）＆無敵状態を付与（１Ｔ）

・怪力　ＥＸ　ＣＴ　５
自身の攻撃力をアップ（２Ｔ）

・第十の精霊　ＥＸ　ＣＴ　７
自身の防御力をアップ（５Ｔ）＆宝具威力アップ（１Ｔ）＆オーバーチャージ段階を２段階アップ（１Ｔ）＆ＮＰ増加（２５％）

保有クラススキル
単独顕現　Ａ
・与ダメアップ

剣の精霊　ＥＸ
・攻撃力をアップ＆防御力をアップ

腹ペコ同盟　ＥＸ
・アルトリア・ペンドラゴン（セイバー）と一緒にクエスト開始時、常時ＮＰ増加状態を付与（１００％）

宝具
最後の剣（ハルヴァンヘレヴ）　Ｂｕｓｔｅｒ宝具
・敵全体に超強力な【人型】特攻の攻撃＆防御力をダウン（２Ｔ）

コマンド構成
Ｂｕｓｔｅｒ
Ｑｕｉｃｋ
Ｑｕｉｃｋ
Ｑｕｉｃｋ
Ａｔｓ

クラス　セイバー・アルターエゴ
真名【夜刀神天香】
ＨＰ　１０８１０
ＡＴＫ　１８０１０

筋力：ＥＸ
耐久：Ｂ

敏捷：Ｂ＋
魔力：ＥＸ
幸運：Ｃ＋
宝具：ＥＸ
所属　中立・悪
性質　星

保有スキル
霊力開放（悪）　Ｂ＋　ＣＴ４
・自身の攻撃力をアップ（３Ｔ）＆ＮＰ獲得率アップ（３Ｔ）＆スター獲得（１５個）

魔王凱旋　ＥＸ　ＣＴ７
・自身の性能（攻撃力／防御力／ＮＰ獲得率／スター獲得率）のうち、一つの効果をアップ（永続）＆敵全体に恐怖状態を付与（８５％・永続）・敵単体に（攻撃力／防御力／クリティカル発生率／クリティカル威力／チャージ／宝具威力）のうち、いずれか一つの効果を無効化（永続）

霊力逆流　Ｂ＋　ＣＴ６
・ＮＰを獲得（１００％）＆毎ターンＮＰ減少（１０％）＆毎ターン宝具威力＆オーバーチャージ段階を１段階上げる効果を付与（３Ｔ）

保有クラススキル
反転精霊　Ａ
・自身の基礎攻撃力を１５０％で固定する。

剣の精霊　Ａ＋＋
・自身の攻撃力＆防御力をアップ。

単独顕現　ＥＸ
・与ダメアップ。

腹ペコ反転同盟　ＥＸ
・アルトリア・ペンドラゴン・オルタ（セイバー）と一緒に戦闘に出た場合毎ターンＮＰリチャージ（５０％）＆攻撃力永続強化状態（倍率１．２倍）を毎ターン付与

宝具
終焉の剣（ペイヴァーシュヘレヴ）　Ｂｕｓｔｅｒ宝具
・敵全体に強力な【人型・精霊】特攻の攻撃＆攻撃後スタン状態を確率で付与（１５％）＆攻撃力を倒した敵の数に応じてアップ（１体につき２５％・永続）

コマンド構成
Ｂｕｓｔｅｒ
Ｂｕｓｔｅｒ
Ｑｕｉｃｋ
Ａｔｓ
Ａｔｓ

「・・・・　ああ、うん。やっぱり二人は二人だったね・・・・。」
「ですわね・・・・　琴里さん!!」
「見えてるわよ！戦闘準備！全方位に来てるわよ！」

琴里の号令で全員が周囲を見渡す。そこにはいつの間に包囲したのか、近接武装を構えた骸骨たちが周囲を包囲していた。琴里と狂三はすでに構えており、十香と天香も自身の剣を構えていた。マシュもその大きな盾を地面から持ち上げている。
「マシュ、お願い！」

「さぁ、私達の戦争を始めましょ？」

「・・・・・ !?まさかそんな・・・ !?」

大聖杯がそびえている大空洞にて待ち構える一人のセイバー・・・・・

アルトリア・オルタは目の前に突如現れた存在に驚いていた。

「お前はなんだ・・・・ 何が狙いだ!?」

【そんなに私は厄介な存在なのかい、セイバーさん？】

目の前にいる白い服装を着た少女はそう問いかける。だが、アルトリアからはノイズのようにしか見えなく、それがますます彼女の警戒心を高めていた。

「お前のような力を持つものがわざわざ私に何の用だ。くだらん事なら吹き飛ばすぞ。」

【至極単純さ、あの子達と未来を救ってほしいのさ。】

「正気か？」
　アルトリアは困惑した顔で目の前にいるノイズに問いかけた。ノイズのようなものは一瞬動きを止めると、少しだけ笑った。
【ああ、正気も正気さ。あいにく私はまだ公の場には明かす事ができない身でね。だからあなたにこれを一緒に託したい。】
「‥‥　これはなんだ？」
【第一の精霊、その潜在意識が眠る結晶さ。もしセイバー、あなたがあちら側につく気になったら渡してあげてね。きっと、あなたにもあの子にも良い結果をもたらす、そう信じてるさ。】
「‥‥　何をするつもりだ？」
【少し、準備をね。】
　その声を最後にノイズは消え去った。アルトリアは目の前においてある純白に輝く結晶を拾うとそのまま鎧の内側にしまい込み、再び持っていた剣を握りしめた。
「良いだろう‥‥　その悪巧み‥‥‥。」

　乗ってやろうじゃないか‥‥‥‥　!!

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｅｎｕｅｄ‥‥‥

第５節　精霊、冬木を救う？

あれから数時間。立香達一行はキャスタークーフーリンと合流し大聖杯があると思われし地点である大空洞に向かっていた。その際、途中でシャドウサーヴァントと呼ばれるものと邂逅していた。

「くっ、まさか大空洞のサーヴァントにやられた奴らが全員残留思念がのこってシャドウサーヴァントになってるとでも言うの!?」
「狂三ちゃん、みんなを大聖杯までおねがい！私がここで食い止めるから！」
「クロエさん!?・・・・ だったら私も！」
「私にはこの子達がいるから！」
そう言ってクロエは懐からもう一つの触媒であるＵＳＢメモリーを取り出した。と言うのもここまでの道中のことである。

クロエは一人寄り道して図書館らしき場所に来ていた。建物は崩落しているが辛うじてパソコンの電源は生きており何とかメモリは読み込める状態だった。クロエは中身を確認すべくそのメモリーをパソコンに差し込んだ。画面を開けてみてみると、

【触媒ファイル】
・Ｈ．Ａ．Ｄ．Ｅ．Ｓ．
・Ｐａｙ．
・Ｔｏｌ．
・Ｌｕｒ．
・Ｎｅｐ．

・A・L・I・C・E・
・Kyar・
・VTD・
・5th・
・???・

と映し出されていた。しかし、クロエはそのファイル群の中にひっそりと紛れていたそれを見逃さなかった。

「・・・・ん？・無記名結晶・・・・？まさかね・・・・？」

最悪の事態ならば、このメモリーは切り札として使える。だが、この5文字がどうしても気になってしょうがないクロエはしばらくその場を動くことができなかった。が、次の瞬間、突如としてパソコンから光が溢れ、その周囲は電撃がバチバチと光っていた。

数秒して3本の帯が出てきたかと思えば一気に爆発し、それと同時にクロエは自身の体内からごっそりと魔力が抜ける感覚がした。煙を掻き分けてクロエが正面を見る。そして青ざめた。なぜならそこには・・・・・。

「おい、遅いぞマスター・・・・　いやクロエ。まだボク達の手は借りないってことか？」

「この私が来たからには！・万事解決です！」

「マスター！・私の声、聞こえてる!?」

「・・・・・　あっ・・・・　終わったこれ・・・・・。」

目の前には受肉した3人の少女・・・・【キャロル】・【エジソン】・【クーロン】の姿があった。

クロエはなぜ呼び出されたかは知らないが来たからには手伝ってもらう腹積もりで現状を説明した。クロエの話を聞いて真っ先に理解したのはやはりと言うべきか。

「ふむ、魔術が主な技術源のこの世界でクロエたちの世界が崩壊するから手伝ってくれ・・・・　ですか、良いですねそれ！」

「ふっ、実働担当、技術担当、戦闘担当。バランスが良くて何よりだ。」
「狙ったように召喚されてますねそれ。」
「因みにみんなのクラスは何なの？」
　クロエは思いついたかのように問うた。はてなマークを浮かび上がらせていた彼女たちは頭から絞り出すように考え込んだ。やがて出てきたのかそれぞれ頭を上げた。

「ボクはバーサーカーだね。理不尽極まりないが。」
「キャロル？それラビットタイプとフラグメントタイプの自分見てから言い直して？」
「オッケーわかった辞めろ。」
「まあちなみに私はキャスターですね。」
「私はルーラー・フォーリナーだったよ！」
「相変わらずのクーロンちゃんで安心した・・・・。」
「なんで!?!?」
「だーれが光源からレーザー出すんですか、あんなの私でもできない技術ですよ？」

　それぞれが言い合う中、ひっそりとメモリーを回収していたクロエは建物から出るべく出口の方へと向かっていく。
「あっ！クロエちゃん待って！」
「急がないといけないの！霊体化出来るでしょ！」
　そう言ってクロエは全速力で空洞の方へと再度向かった。キャロルたちも後を追うべく霊体化し空洞へ向かった。

そして現在に戻る。立香達は既に大聖杯の方へ向かっているため姿が見えなくなっている。それを確認したクロエは見えてるかのように見渡す。

「居るんでしょ？出てきて！」

クロエが叫ぶと同時に左右に出てくる３人。

「さて、敵はあいつか。弱すぎて笑いそうだ。」

「キャロルさん？油断は禁物ですよ、クラス詐欺なんてしょっちゅうありますから！」

「とりあえずバテるまでやれば良いよね⁉」

「頼める⁉私は立香達を追うから片付き次第合流を！」

「「分かった（よ）!!」」

クロエは３人に指示を出して一人大聖杯のもとへ走って行った。それを見送った三人は各々の武装を取り出した。キャロルは電子蝶々を、エジソンはスタンライフル、そしてクーロンはライトとマイクを。

「「さぁ、戦闘開始だ（よ）！」」

三人にシャドウサーヴァントの相手を任せて狂三ちゃん達のもとに追いつくため大聖杯へと全力疾走していた私。さほど距離も無かったのかすぐに入り口が見えてきて私は更に速度を上げた。入り口をくぐるとそこには息を呑む光景が写った。

そこには精霊四人が総出で対面する姿があった。立香達も四人の援護をするべくその巨大なシールドで攻撃をはじいている。そして、その攻撃している主は持っている剣を光らせ今にも振り下ろしそうな光景が見えていた。条件反射で私は全員をこの場から帰らせるため、こう命じた。

「皆!!天使を!!!」

「皆!!天使を!!」

遠くから聞こえたその小さな声を四人は見逃さなかった。

「きひひひっ!!ようやく私達の本気が出せますわね!!」

「クロエが言うのならば、こやつはそれを使うに値するとクロエが認めたのだ、最初から全力で挑もうではないか。」

「・・・・ふん。私にとっては有象無象も甚だしい。」
「まあいいじゃない。でも、あいつには手を抜いたら私達でもただでは済まないわ。」
　四人はそれぞれ自身の最強の矛である天使を顕現させる。それを見てマシュ達四人はそれぞれようやく彼女たちがどういう存在であるのか気づいたのか顔が真顔になった。
「えっ・・・・天使って、もしかして・・・・・・。」
「ええ、そうよ。私達は大昔この地球に顕現してこの地を破壊し、最終的に消え去った精霊。その本人よ。まあ、実際精霊だからって肉体年齢が変わるのかと言われると答えはＮｏになるけど、少なくとも今の私達の記憶は死んだところまでしかないわ。それより!!あの女性の名前は何よ!剣は禍々しいし!さっきからモルガンとか言ってるし!」
　最初は丁寧に説明していたが後からキレだした琴里に対し、オルガマリーは最後の言葉を聞き漏らしていなかったのかしばらく思案し、そして閃いたかのように叫んだ。
「モルガンってことはその剣士はブリテンのアルトリア王よ!それもおそらくその負の側面!!」
「ファァァァッッゥゥゥ!!アルトリアってあれでしょ!!アカン剣ビーブッパする剣士でしょ!?ファァァァッッゥゥゥ!!」
「刻々帝じゃ射程の割が合いませんわ!?」
「かと言って私の【最後の剣】でも・・・・・・。」
「私の【砲】は一応射程内だとは思うけど多分届かないわね。そのアルトリアが伝説のとおりなら私達の攻撃なんて全部弾かれるわ。」
「・・・・アレがあれば問答無用で消し飛ばせるんだけど・・・・。」
『そんなに悠長に話してる時間は無いみたいだよ!敵サーヴァントより膨大な魔力反応!』
　ロマニからの報告を聞いた三人は瞬時に目の前のブリテン王を見る。そこには剣を真っ直ぐに構えたアルトリアの姿が・・・・。
「ファァァァッッゥゥゥ!?アバババッバババあれを防ぐ手立ては私達には持ち合わせてないよ!?」

「マシュ!!」
「っ！・・・・・ はい！」
慌てるクロエを目の前に立香はマシュのシールドを思い出しマシュに叫ぶ。マシュはその意図を読み取りその巨大な盾を全員の目の前にドスンと構えた。
「嬢ちゃん、気を強く持つんだ、そうすればあいつの宝具は防げる。」
「はい！」
クーフーリンから助言をもらったマシュはここぞとばかりに盾をガシンと音を立てて目の前に展開した。
「覚悟は決まったようだな・・・ !!エクスカリバー・・・ モォォルガァァァンン!!」

負の王から放たれたそれは周囲を吹き飛ばしマシュのシールドを襲う。あまりの出力にじわじわと押される。が、それを立香が支え必死に食らいつく。
「マシュ、やるぞ！」
「はい！マスター！」
二人がかりで防いでいた宝具はとうとう使い果たしたのかその奔流は消え去った。
「ほう、防ぎきったか。流石はあいつが見込むだけある。」
「あいつ？」
クロエはアルトリアか発した言葉に疑問符を浮かべていた。見込み通り、それを彼女が述べていたならば誰かがうしろについている。
だがその考えは他ならぬ彼女によっておられようとしていた。

Ｔｏ Ｂｅ Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・・・

第6節　セフィロトとソロモン

「いやはや、ここまで生き残るとは思っても見なかったよ。」
　何者かの声が聞こえた。一同は各々の武器を構えその声のする大聖杯に顔を向ける。その人物を見てオルガマリーの顔が一瞬崩れたのをクロエは見た。
「ああっ！・・・・ レフ、レフじゃない！どこにもいなくて心配したのよ！」
「ふん、生き残っていたか・・・・・・

このゴミ虫共めが。」

「「!?」」
「みんな！天使出力最大！この人からやばい気配がする！」
　クロエの号令を受けて狂三達は天使を再度出すと自分達の持てる最大出力の武装を展開していく。そしてクロエ自身も道中で拾ったスナイパーライフルを向ける。

「あなたはレフとやらでは無いね!?」
「ああ、そうさ。レフは仮初の姿。そして、貴様らはここで消える。我ら魔神柱の手に寄ってな。」
「はん、仮初の姿ね？そんな汚い格好して。それに魔神柱なんて結局は柱。焼けば問題ないわ。」
「果たしてどうかな？ソロモン７２柱のうちの大使である私がここにいるのだ。貴様等は返すことなく殺させてもらうよ！」
「へぇ・・・・ 仮初の姿でソロモン・・・ ですか。」
「魔神柱も案外大したことなさそうだな。」
「我らセフィロトにかかればソロモンなんて足元にも及ばぬわ。」
「それに、仮初の姿ならそれ専門のプロが居るしね！」

クロエがそう言うと、全員がはてなマークを頭に掲げた。唯一レフはいち早く復帰すると持っていた聖杯を空に掲げた。
「ここまで来たご褒美にオルガマリーには今のカルデアスを見せて差し上げよう。」
「!?」
聖杯により空間が濁ったそれは全員の空に映し出された。だが、その空間はすぐに閉じられた。
「!?」
「ふん、たかがその程度の魔力濃度の魔術行使ですか。笑止!!これくらいなら私の手にかかれば解除可能です!」
「それにだ、仮初の姿やらなんやら言ってくれたが私は一人で7つの形態を持っている兎だぞ。少数程度蹴散らす謎訳もない。」
「君の遠吠えはどうしたのかな!?もっと!聞こえないよ!」
「エジソンちゃん!キャロルん!クーロンちゃん!」
空間を閉じた主はクロエたちの仲間であるキャロル・クーロン・エジソン三人衆だった。
「ふふっ、これでチェックメイトですね!クロエさん!」
「オッケー!立香くん!全員をマシュの後ろに!」
「あ、はい!!」
クロエの指示で全員がマシュの大きなシールドの裏に隠れる。そして、
「一か八か!!使えるなら!!」
クロエはなにかつぶやくと自身の両手に何かを発生させた。それを見た狂三達は何故かレフに哀れみの目を向けていた。
「あっ・・・・。」
「えっ?ちょっと琴里、これどういうことよ?」
「クロエちゃんの奥の手が今そこに顕現してるのよ・・・・。対範囲宝具とでも言うべきかしら。私達が生まれる16年前、更にそれより前に開発され今もなお改修が続けられているクロエちゃんだけの兵装、【対神霊・精霊用ハイパー・メガ・ビーム・ランチャー】。魔神柱って言うくらいだから神霊特攻が刺さるかもしれないけども、それ以前に

純粋な素の威力で潰れるかもね。」
「そんなの！……。」
「言いたいことはわかるわ。でも今この状況を脱するにはこれしかないのよ。」
琴里はクロエがメガビーをチャージする姿をみつめながらそう告げた。その数瞬の後、クロエのメガビーから奔流が溢れた。

結論から言うと、レフは粉々に消滅した。３人に気を取られていたレフは魔力反応ではないメガビーに気付くことができなかったのだ。レフが消滅したことにより聖杯も回収され特異点の崩壊が始まった。そしてカルデアへの帰還が始まったが……。
「え？……帰れないの？」
『ああ、所長の肉体はすでに爆発により粉々に消失している。帰還したらすぐに君は消えてなくなるだろう。』
「そんな！……まだ誰にも認められてないのに……!!」
ロマニからの報告を聞き茫然自失としているオルガマリーを見ていた精霊＋四人は、
「……クロエちゃん、なんとかできる方法はないの？」
「……ある、といえばあるけど……保証が無いっていうか……。」
「望みがあるならやるべきだぞクロエ。」
「そうですわ。やってみてだめならそれまで、ですわ。」
「……はアアアア……。」
クロエは勘弁したかのように両手を上げると懐から大きな結晶を取り出した。精霊達はそれが何かを一瞬で察した。
「オルガマリー所長。もし本当に生きたいのであれば、悪魔と契約します？」

「悪魔？何よそれ。」
　オルガマリーがそう返すのに合わせてマシュと立香もこてんと首を傾げていた。クロエは悪い笑顔で淡々とそう告げた。
「これは体内組織を蘇生させると共に内部構造から変える代物。通称【霊結晶】。」
「霊結晶って・・・・ !?」
「そう、私達の力の根源であり私達の核となる・・・ 言わば心臓のようなものですわ。」
「これを使えば所長は蘇生してカルデアへ帰還することができる。けど、その代わり身体組織が諸々変わって今までの自分では居られなくなる・・・・ それでも使う？」
　クロエが冷たく言うとオルガマリーは考える間もなく口を開いた。
「答えは決まってるわ。【Ｙｅｓ】よ。人理修復という大きな目標があるのに、こんなところで一人では死ねないわ。それに、二人のサポートを残った人員だけではどうせ手が回らないでしょうし。」
「ふふっ、それでこそ所長たるもの。」
　そう言いクロエはオルガマリーの胸部に霊結晶を押し込んだ。程なくして光が迸り同時に特異点の崩壊が限界に達する。
「・・・ じゃあ、カルデアの英霊召喚で待ってますよ!!」
「ええ！・・・・ え？」
「「は？」」
　そんなクロエの断末魔で特異点Ｆは終焉を迎えた。

「むう！……　そうだ！ここって……。」
「英霊の座だ。お前が英霊になるとは……　何をしでかしたんだ？」
「あの精霊やらいっぱい連れてる彼女に蘇生してもらったのよ……。そうしたら……。」

「ほう……【あの子が霊結晶を使った蘇生をするなんて、あなたよっぽど気に入られたのね？】……　お前か。」
「!?!?!?」
　オルガマリーは声の主を探すべくきょろきょろする。まあ実際には上下左右の感覚なんてないわけだが。
「ああ、お前には見えていないんだな。」
「何なのこの声!?」
「この声の主はあのクロエとやらとその周囲にいた少女達にその霊結晶とやらを渡したやつだよ。」
【もう、そんな丁寧に説明しなくてもいいのに。】
　くすんだ、そんな声があたりに響き渡る。しかしオルガマリーは未だにその声の中心を探そうと躍起になっていた。
【まあ、私はまだ皆の前には明かせない身だから。今は、ね？】
「……　いつかは、その姿を見せてくれるのね？」
【来たるべき時が来たなら、ね？】
「なら、こちらから模索することは無いわ。どうやらあいつ等が呼んでいるみたいだし。」
　そう言いオルガマリーは向こうの方に指を向けた。そこには一筋の光がこちらを呼び寄せるかのように輝いている。
【なら、一旦ここでお別れだね。】
「アイツらのこと、良く思ってるならなるべく早く会ってあげなさい

よ？」
そう言ってオルガマリーは光の方へ足をすすめる。この手に平穏を取り戻すために。

さて、この時が来てしまったか。立香君が目を冷ましてからはや数時間。特異点Ｆを修復した私達は戦力増強のため英霊召喚システムの置いてある部屋に来ていた。もちろん私は必要ないけどあの三人を正式に呼び出さないといけないし、ということで自ら足を運んだ。
「クロエちゃんのおかげで魔力リソースには余裕がある。１０騎までなら今のカルデアでもなんとかなるだろう。」
１０騎、か。３騎は私達の仲間でうまることを想定して、立香君はオルガマリー確定召喚のために最低２枠。半分は運ゲー、か。
「よし！システム作動！」
既に魔力を取り込んであるシステムを戸惑いもなくダヴィンチちゃんが始動させた。大きく光の輪が飛び出しあたり一面を覆う。そしてその先には・・・・。

「クラス、キャスター！」
「……　ようやく、帰ってこれたわね。」
「……　所長!!」
そこには、クロエによって蘇生し精霊となったオルガマリーの姿があった。
Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

第7節　その縁は地よりも深く

オルガマリーが来てから数十分後、立て直した職員が慌ただしく召喚の準備を勧めていた。
「立香、今から行う召喚はあなたと縁を結んだ英霊だけが来てくれるわ。どの霊が呼び答えてくれるかは運次第だけど。」
「んまぁ、十中八九シャドウサーヴァントの中身じゃないかなぁ……。と言うかなーんか忘れてる気がするのよね……。」
クロエが必死に考え込む中、立香は余剰した聖晶石を突っ込んだ。石は粉々に砕け3本の線が黄金に輝く。
「高濃度霊基反応！クラスはアーチャー……　だよねこれ？」
「????」
「ロマニ？どういうことよ？」
「いや……　この反応は確かにアーチャーなんだけど……　別の霊基も混ざってるんだよね。」
「早速不穏だよこれぇ！」
「クラスは？」
「……　セイバーだね。……　それも聖杯級の魔力炉を有してるよ。」
「……　まさかね？」
クロエがまさかとは思いあとから来ていた琴里達にこそこそと話しかける。
「狂三の他に射撃系統持ってる精霊って一人しかいないよね。」
「え、えぇ……　あいつしか居ないわね……。」
苦笑いするクロエ達を尻目に3本の線が収束し光が辺り一体を覆った。そして一人の人型を形づくる。
「サーヴァントセイバー、真名はアルトリア・ペンドラゴン。その負の側面だ。所詮アルトリア・オルタとでも呼ぶがいい。」
英霊召喚に応じたのはあの冬木でラスボスであったアルトリアであった。しかし、一同は予測通りの反応ではなかったのか頭を横に倒していた。

「ねぇロマニ？アーチャー反応なんてどこにもないじゃない？」
「おかしいなぁ、確かに霊基反応はアーチャー反応を示してるんだ。」
「どれどれ……　ふむ、確かにアーチャー反応は出てるね。となると、アルトリアの持ち物にアーチャーになり得るものがあると見たほうが良さそうだ。」
　ロマニとダヴィンチがそれぞれ話しているとアルトリアは思い出したかのようにクロエ達の方へ近づいていく。
「……　お前がクロエだな？」
「ええそうよ？何が御用？」
「アイツから約束されたものを渡しておきたくてな。本人曰く【まだ明かせない】らしい。」
　そう言って懐から白と黒に光る結晶を取り出した。それを見た一同は思った通りの物だったのか真顔だった。
「琴里ちゃん、間違いなくこれあの子だね。」
「……　ロマニ、借りるわよ。」
　いつの間にか本業をする為なのか霊装を解きラタトスク司令官服を身に纏っていた琴里。ロマニからコンソールを強引に譲ってもらうと術式を組んでいく。
「まさかとは思うけどさっきの二の舞にはなってほしくはないんだから!!」
「霊結晶設置完了、やっちゃって！」
「おーけー！……　あんたにやる気があるならその呼びかけに応じなさい！折紙!!」

　琴里の呼び声と共に始まったそれは虹色の帯を輝かせていく。
「っ!?霊基反応！クラスはアーチャー！」
「っ、ビンゴ！」
「もう一基も確認！クラスはアーチャー……　アヴェンジャー!?」
　ロマニの余計な一言で一瞬にして全員の顔から覇気と笑顔が消えた。
「……　デビルゥ……。」

「なんだ、私の同類か。」
　非情なつぶやきと共に光は霧散しその中から一人の・・・・　いや二人の人物が姿を表した。
「・・・・　絶滅天使、もう一度使う日が来るとは思ってなかった。」
「・・・・　の割にはもう一人の折紙ちゃんは物凄くテンションが上がってるように見えるんだけど????」
　そこには純白の霊装を纏った折紙、そして真反対の漆黒の霊装を身に纏い白折紙より髪の毛が若干長い折紙がそこにいた。
「ふっ、いらっしゃい折紙。反転体が分離してるのはいささか困惑してると思うけどとりあえず今は歓迎するわ。」
「あっ、はい。」
「・・・・　どうしてあなたがここに。」
「呼ばれたのよ、アイツに。」
　そう言い琴里はクロエの方を指差した。それを見た二人はああ、と納得していた。
「感動の再開もそこまでにしてくれー。」
　ロマニが琴里達を制止し次の召喚へ移る。今のところはオルタのみ。最悪特異点をオルタのみでとか洒落にならないと感じているロマニはいつもより魔力を多めに流す。その願いは通じたのか一基のサーヴァント反応。
「サーヴァント反応!・クラスはキャスター!」
「キャスフーリン?・もしかして。」
　立香が静かにそう予想するが思いもよらぬ方向に自体は動く。
「サーヴァント、キャスター。トーマス・アルバ・エジソンである!・顔のことは気にするな!・これはアメリカの象徴である!」
「ほー、エジソンか。・・・・・　ん?・クロエちゃん?」
　ダ・ヴィンチがクロエの方を向くとそこには何故か唸るクロエの姿が。
「・・・・　これじゃない・・・・・・　!!」
「えっ?」
「ええい!・エジソンにとりあえずそこらへんにあったポリゴンをシュ

ウゥゥゥゥ!!!」
『ええっ!?』
「何・・・・!?オウファッ!?」
豪速球で投げられたポリゴンらしき物体はエジソンを捉えそのままふっ飛ばした。その数瞬後、ポリゴンがエジソンの体を包み込む。
「この反応は・・・・霊基再臨だって!?」
ロマニの反応からして予想外のことだったのか、全員が身構える中一人クロエはしてやったり、と言った顔をしていた。

【この私に掛かれば!万事解決です!!!】
「よぉっし!!!」
クロエ、迫真のガッツポーズ。その間にも光輝くエジソンだったが、やがてその光が収まり、全貌が明らかになった。
「まさかここまでつながりが薄いとは思いませんでしたね・・・・今宵は準グランドサーヴァント、キャスター!ＡＬＩＣＥ新生セブンアカデミアズの技術畑担当、確喜の発鳴者エジソンとは私のことです!!」

「エジソンちゃんいらっしゃい!」
「もーマスｔ・・・・クロエちゃん遅いですよー!!」
「仕方ないでしょ、完全に縁だよりだもん。」
「は、はぁ・・・・あ、そう言えば座で漂っていたときに彼に会いましたよ。」
「彼?」
「・・・・あっ、これは分からせないとならないみたいですね・・・・・・。」
エジソンはクロエから離れると右手に武器であろう剣を実体化させ例の召喚機器へ向かう。
「ふふっ、【このエジソンにお任せあれッ!!】」
「・・・・!?勝手に召喚が!?」
「えっ!?」
「先輩!例の機器から強い召喚反応!もしものことがあったら危険です!一旦下がっててください!!」

「あ、ああ!!」
　マシュに言われ下がる立香。そこに観測していたロマニからの報告が入る。
「サーヴァント反応！クラスはセイバー！……　だけどこれは……!!」
【まぁぁぁすたぁぁぁぁぁぁぁ!!!!】
「ヒッ……　も、もしかして……。」!!
「ようやく思い出したみたいですね、個体名ブラダマンテ……　!!!」
　エジソンの声とともに召喚機器が魔力逆流による爆発を起こす。そしてその爆炎から一人の姿が飛び出してきた。
「クゥゥゥロォォォエェェェちゃぁぁぁぁぁぁんんん!!!」
「ア、アストルグフォッ!?」
　飛び出してくるや否や宝具を起動しながら突っ込んできたアストルフォを諸に食らったクロエ。コロコロ転がりながらしまいには壁に勢いよくぶつけた。
「ア、アストルフォ……　シャルルマーニュ十二勇士のうちの一人です……　か。」
「そうだよー。まあ最も、今は琴里ちゃん達の性質に近いかな～。」
「?もしかしてアストルフォ、まさか君もかい?」
　ロマニが霊基反応に違和感があったのか訪ねてくると、アストルフォはドヤ顔で、
「そうだよ！第十二の霊結晶の持ち主こと【アストルフォ】だよ?」
「……　まーた複雑なことになった……。」
「だ、大丈夫……　実力は保証するから……。」
　頭を抱えるダヴィンチちゃんとそれをなだめるクロエ。エジソンは吹き飛んだクロエを起こしてこちらへと戻ってくる。
「さて、ひと悶着ありましたが私が来たってことはセブンアカデミアズの触媒は揃ったも同然ですよ！則ち！」
　エジソンがそう言うと同時に再び動き出す召喚装置。
「ま、また突然!?しかもなんだこの反応!?クラスは【ライダー・アヴェ

ンジャー・バーサーカー】!?」
「ロマニ・・・・ そんなわけわかんない冗談なんて言ってる場合じゃ・・・・ 何なのこの反応!?みんな下がって!魔力的にも大型のサーヴァントが来る!!」
　ロマニとダヴィンチの警告で全員が身構える中、エジソンとクロエは呆れた顔をしていた。
「・・・・ セブンアカデミアズって言ったよね？（ニッコリ」
「・・・・・ 創設者だし大丈夫じゃない？」
「フラグメントだったら？」
「エポイックエボリューションするしかないじゃない？」
　不穏な二人の会話の背後で強大な爆発が起きる。全員が煙が晴れるのを待っていると。
「アイツが居なくなったから辿ってみれば・・・・ 中々食いがいがあるサーバーじゃないか、くくく!!」
「・・・・ キャロルー???」
「おっと本音が、これは失敬。さて、我が名はキャロル。リソース削減のため今はこの姿だが・・・・。」
　そういいキャロルは自らの小さい体を霧散させると新たに一人の姿を形どっていく。左眼が蝶に食われ全体がある人物を彷彿とさせる服装に誰もがその名を思い出す。
「お前らにとってはこちらの姿のほうが馴染みがあるだろう？」
「あっ!?」
「自力で霊基再臨だって!?何だこいつ!?」
　思い出した立香とデータ値が異常で驚愕しているロマニ。なお他の琴里達は、
「あら～・・・・ あの時なんかあると思ったらやっぱりあなただったのね・・・・・。」
　呆れる琴里。それを見ていたキャロルは心の中でここにもサーバーがあったら女王でも振りまいてやろうかと思ったとは、後日談である。

To be Continued……

第8節　シスターズ、降臨

「ふむ、あと3基までなら余裕はあるけど。」
　ロマニがリソースを見てそう言うと、クロエは立香に優先的にリソースを割くように提言した。ロマニは頷くと、再び召喚を開始する。
　3本の金色の霊脈線が奔流を生み出す。
「霊基パターン！アーチャー！」
　光が収まり、全員がその方向を向くと、赤い服装に身を包んだ白髪の男がそこにいた。
「クラス、アーチャー。エミヤだ。ふむ、出会いたくない顔は居ないか……。」
「なるほど、エミヤはとても頼りになるわ！」
「抑止力案件が来るのか……　ちょっと面倒ね……。」
　オルガマリーと反対の反応を示す琴里だったが、内心戦力の向上には喜んでいた。いくら精霊とはいえ無尽蔵に火力を出せるというわけではないのでリソースを節約できるという意味合いではありがたいのである。
「さあ、後2基だ。」
　ロマニはそう言うと再び召喚を進める。【精霊オルガマリー】、【アルトリア・オルタ】、【折紙×2】、【エジソン（クラフィの姿）】、【アストルフォ】、【キャロル】、【エミヤ】、彼等に続く9人目の英霊を迎えるべく、全員がロマンの方を見据える。
「出た！パターン【フォーリナー】!!」
「フォーリナー!?」
　オルガマリーが驚愕の表情でロマニを振り回す。
「フォーリナーなんて一個も結んでないでしょ!?どうして呼び寄せてるのよ!?」
「僕にもわからないよっ!!一つ言えるならエジソン、君に惹かれてるっ!!」
「私に、ですか？」

「あぁ。フォーリナーの核とも呼べる部分がエジソン、君と呼応してるんだ。」
「私と、ですか？」
　エジソンが少し考え込む。すると、なにか思い浮かんだのか、エジソンのそばにいたキャロルが頭を上げた。
「いるじゃあないか、お前と同じ因子を番えながらもアリスを手助けした……　!!」
「……　!?そうか、そういうことですか!!」
　全員の視線がエジソンとキャロルの方に向く。
　かつてエジソン顕現の直後に現れたのんびり気ままに動くヒーラー。それが現れたというのか、否。

「来ちゃった～！」
「やっぱり……　あなたならこういう面白い事には手を出すかと思ったけど……。」
「だって君がいるならどこでも楽しいじゃん～。それに～……。」
　猫耳っぽいフードを被った少女？が指を鳴らすと、召喚直後なのにも関わらず最後の召喚が始まる。
「んんん？？？？」
「今回はイレギュラーが多すぎる!!」
「あなた達って自由すぎるわね!?」
「でもＥＸＰＯのときはこの子が全員まとめてたんだよ～？」
　呑気につぶやく彼女を尻目に最後の召喚の光が輝く。
「霊基パターン！クラス、ルーラー、フォーリナー!!」
「……　誰か一人足りないと思ったら!!」
　クロエがエジソンたちの方を向き頭を抱える。それと同時に前にとある子からの発言を思い出した二人も、
「あー……　いましたね彼女も。みんなのインパクトが強すぎて忘れてましたが……。」
「あぁ……　私達に平穏はありまして？」
「あるわけ無いでしょ狂三……　私だって胃薬ほしいくらいなの

に……。」
　ぶつくさと喋る琴里と狂三。そしてついに光が収束し、ツインテの少女の姿が見えた。しかしそれはもちろん。
「やっほー！冬木以来だねっ！みんなのアイドルＶＴＤのクーロンちゃんだよっ！クロエちゃん、色々よろしくね！」
「あい……。」
　頭を抱えるクロエ。それもそうであろう。７人分の現界するだけの魔力を一人で支えるなど無理な話である。現状エジソンが事情を聞くなり急ピッチで作業をしているがそれでもカツカツなのである。ロマンが言っていた１０基分とは単体クラスのサーヴァント１０基分の場合の話であり、クーロンが来たことにより１１基分。微妙に足りないのである。そんな時だった。
「あ、そう言えばクロエちゃん。私達魔力いらないよ？」
「え？」
「あれ？キャロルから聞いてなかったの？」
　エジソンが不意にそう告げる。クロエはぽかんとしていた。作業の手を緩めずそのままエジソンは話を続ける。
「あのあと英雄の座ってところでアイツに出会ってね、手助けするのに十分なくらいの魔力の動力源であるアレを貰ったの。」
「アレ？」
「うん、コロンの引き籠もりちゃんがいずれそっちに押し掛けるからデータ取りの手伝いしろってこれをね。」
　そう言うと、エジソンは片手の動きを止めず片方の手で髪につけているリボンを手に取る。
「永続的魔力、いや、電力供給機関及び最適化機構であるＥｖｏｌｕｔｉｏｎＳｙａｔｅｍ。それを託されたんです。」
「……　は？いや待って、あれってシールドセヴンの子たち以外は全員無くなったんじゃないの!?」
　クロエの言うことにキャロルはバツの悪そうな顔をしていた。というのも、ＡＬＩＣＥ内では以前内部紛争が起こっていた。その際、

ＥｖＳが猛威を振るい彼女らを苦しめていたのだ。最も、そのＥｖＳはシールドセヴンに引き継がれ、あるべき使用用途へと切り替わっている。コロンの引き籠もりはこれで表舞台から消え去るつもりだったがそうは適合者が降ろさない。適合者がダーウィンとの共存を望みそれに渋々、いや、涙を流して受け入れた彼女は最後に持ってそのまま保管していたオリジナルのＥｖＳを自身で再度展開し、共生することを決めた。と。ここまで聞けばただの良い話なのだが、ここからが問題だった。

「ハァ？僕にみんなにも使えるＥｖＳを作れ、だと？」

「ああ、またあんな紛争、そして災害が来るかわからないからな。今は僕たちで事足りるがいずれそれを越えてくる可能性だってある。それならば対応できる人は多いほうが越したことはない。」

「だけどアレはなァ・・・・。」

「すでに３人ほどテスト候補者が名乗り出ている。」

「早いな？誰がその計画を立てた？」

「アリスに・・・・ クーロンに・・・・・ フェルミ、そしてフロイトにエジソンだったか。」

「全く意味がわからないなァ!?」

適合者の肩に乗ってるダーウィンが困惑の表情をしている。アリスはその存在の観点上必要なのはわかるが残りの四人は・・・・ 明らかになにか企んでいるのはダーウィンからして分かっていた。だからこそ、

「お断りだなァ。あんな危険物をそうやすやすと渡すわけには行かないし、何より僕が作り方を知らないんだ。あくまで僕はリアルに存在していた僕と共同開発しただけ。根本的な作り方はすでに誰もわからなくなっているのさ。」

「・・・・・・ ならそれがあればいいんですね？」

不意に聞こえた声に全員が首を向ける。そこにはシールドセヴンの総合統括者であるメビウスがいた。だが、そのメビウスの物言いに少し違和感を覚えたダーウィン。

「・・・・ なんだ？その含みのある物言いはァ。」

「その、ですね……。アリスが止めようとはしたんですが……。」
「……。まさか。」
「はい……。そのまさかです。先程アカデミア技術四人組から連絡があり、ＥｖＳの製造法の解読、及び試作品５つのロールアウトが終わった、と。」
「いくらなんでも話が飛び過ぎじゃないか!?」
　あまりにもの事の速さにシュレディンガーが驚愕しダーウィンは開いた口が塞がらない。更にメビウスが続けて、
「尚、この試作品はうち３つが【コッククロフト】、【フーコー】、【ギルバート】との適合治験に使用され、いずれも適応したとの報告が……。」
「……。なんてことだ。」
「……。ねえ、僕もう一回引き篭もっていいかなァ？」
「誰にも文句は言えないと思います……。」
　どんよりとした表情で完全に意気消沈しているダーウィン。シュレディンガー達はバカ四人に軽く殺意を覚えたが何分成果を出しているので強く言えない。暫くして口を開いたのはダーウィンだった。
「仕方ない、僕も腹ァ括るとするよ。四人に連絡して製造法をこちらに通してくれ。何、時間はかかるが確実に作り出してみせるさァ。」

「とまあそんなわけで私達は魔力が要らないんですよ。だから実質１０基。何ら問題はないですね。」
「あれ、でもそれじゃその試験的に作られた残り２個の行方は？」
「そうだな、残り２個も誰かに使われていてもおかしくないはずだわ。」
「残りの２つはね……。」
　その時だった。突如轟音と共に召喚が始まる。
「!?何だ、突然動き出した!!」
「ロマニ、一体どうなってるの!!」
「わかるわけ無いでしょ所長!!少なくともパターンはセイバーとルーラー・フォーリナー!!」
「はぁ!?まだ２基来るの!?」
　全員が慌てている中、落ち着いたクロエと狂三達はエジソンたちの方を見ると、
「あぁ、これ絶対来ましたね。」
「…　あいつの面倒は俺が見る……。」
「じゃあ彼女は私だね……　はぁ。」
「（絶対コレ彼女たちなんかやらかしましたわね？）」
「なんとなーく予想はついたよ。」
「奇遇ね、私もよ……。」
　三人がため息をつくと同時に光が収束しその姿を映し出す。
「見つけたわよ、パパ！もう逃さないんだからっ！」
「…　あれ？ＥｖＳでディザボコボコにしてたら……　???」
　一人は赤髪の少女、もうひとりはうさ耳のようなリボンをつけた帽子を被った少女。どちらもエジソンたちにとっては見覚えしかない人物だった。

「ああ、来ちゃったのね…　アリス、フロイト……。」

To be continued……

第9節　ぐらんどおーだー？

　とてつもないイレギュラーばかりの召喚が終わり、改めて全員が揃ったところで所長の案により顔合わせがなされることになった。そのため唯一復旧が優先的に進んでいるカルデアス管理室に全員が集まる。

「さて、全員集まったわね。ここに来てもらったのは他でもありません。先の戦闘で私達は２０１７年までに人理修復を為さねば全員焼却されると言う事実を目の当たりにしました。そして、私達もまたこれを防ぐため人理焼却阻止計画であるグランドオーダーの開始を告げたいと思います。現在、確認できるだけでも7つの特異点が確認されているわ。場所はフランス、ローマ、太平洋、イギリス、アメリカ、ブリテン、そしてアフリカ。それぞれの地に赴き原因である【聖杯】を回収するのが主な任務になるわ。残念ながら私は所長故にここから動けないけどね。けど、私はクロエちゃんに救われたこの命で全力であなた達をサポートすると宣言するわ。」

　そう言うと、オルガマリーは自身の力を開放した。先程までのカルデア制服とは違い、神々しい衣装を纏いまるで天使のような姿であった。

「あの霊結晶無色透明だったはずなのになんでこんなわかりやすーい衣装になってるのかなこれ。」

「なんか、いずれ来そうねこれ。」

　しかしなんの衣装なのかわかった二人は少し顔を赤らめていた。そしてオルガマリーの左にいた……　たしかロマニとか呼ばれていたか……　人物にオルガマリーの視線が向いた。

「ふぅ、改めて紹介しておくことにしよう。僕はロマニ・アーキマン。ここの施設の管理、あとはドクターとしての官位も担当する。君たちが倒れたらそれこそ終わりだからね。やると言ったら徹底的にやらせてもらうよ。」

　当初の慌てようはどこへやら。後ろ髪を結ったロマニはすでに最

初の特異点の特定を進めながらであったのか少し不規則な声調子だった。
「さて、あなた達サーヴァントのこと、教えてもらうわよ？戦術的にも重要なことだし。」
「仕方あるまい。先程も申したが真名はアルトリア・ペンドラゴンだ。私は一国の民を導けるほど神聖ではない。故にその側面、オルタとして名乗らせてもらう。戦闘パターンはお前らが対面した通りの戦い方であっている。まあ、せいぜい私を失望させないでおくれよ？」
　そう言うとアルトリアは自らの剣を手入れすべくあてがわれた部屋へと戻っていった。その様子を見ていた立夏は少し苦笑いをしていた。
「おっと、俺の番だったか。俺はエミヤ。クラスはアーチャーとしての現界を果たしている。本来なら世界の抑止者としての仕事が起きた場合にしか私はやってこないが、どうやら不確定要素の為に私は呼び出されたらしい。」
　そう言うと、エミヤは目線をクロエ達の方へ……、

「あれ、そう言えばクロエはどうしたのかしら？」
「ああ、クロエさんなら宝具のメンテナンスのために本司令部に籠もっていますわよ？あれはあの子にしか扱えないのでどうしても微調整が必要になるんですわ。」
　狂三の説明で納得がいったのかそれ以上聞くようなことはしなかった。それを見届けていたアストルフォ。ようやく出番が来たのを悟るとステルスモードを解除した。

「さて、ようやく僕の出番だね？真名はアストルフォ。シャルルマーニュ１２勇士のうちが一人で今は精霊だよっ！クラスは最優のセイバー！多少頼りないかもしれないけど許してね！」
「【精霊】っていう単語がつくだけでろくでもないことになりそうだと感じるのは私だけかしら？」
　頭を抱え溜息をつくオルガマリー。もちろん精霊の案件だ。アス

トルフォ自体はシャルルマーニュ十二勇士として名を馳せているがあくまでもライダーとして。つまりセイバーとして召喚するやつはそうそういないため実力面でも心配なのだ。だが、
「マリーちゃんが思ってるような心配はいらないよ？こう見えてアストルフォ、精霊全員と戦って9割勝ちに持っていけるし。」
「へっ!?」
「そうだよー？多少手加減はしてもらってるけどそれでもだね。」
　周囲から告げられる衝撃の事実に驚きを隠せないオルガマリー。しかし召喚タイムで慣れてしまったのか、最初ほどの反応は見せなくなっていた。

「さて、ここからは私達の方ね。【識別名】イフリート、炎の精霊こと五河琴里よ。今回はカルデアクルーが人員不足な以上サポートを受け持つわ。きっちりこのグランドオーダーは完遂させてみせるから、目ン玉穿って見ておきなさいよ？」
「キヒヒ、相わらず御用心深いことで。さて……　私の名前は時崎狂三。第三の精霊、または時の精霊とも呼ばれていますわ。今宵はアーチャーとして呼ばれまして、識別名はナイトメア。そして天使は時をも操る刻々帝、進むも戻すも思うまま、ですわ。」
　二人がそれぞれの天使を顕現させ周囲に周知させる。見慣れたクロエたちは何の反応も示さないが、バタバタしててしっかりと仲間について知っていなかった者たちについてはそれぞれ3種3様な反応だった。落ち着いた反応をする者。戸惑いつつも受け入れる者。完全に驚き、目を輝かせている者。特にロマンの反応はすごいものだった。
「まあ、狂三ちゃんは特別だからね。響ちゃんよぶ？」
「あの人の御守りをするのは勘弁ですわ……。」
「よーし第一特異点終わったら呼んじゃおうっかな～！」
「クロエサン!?!?!」
「こらクロエ、流石に可愛そうだぞ？クイーンもつけてやるべきだと思うぞ？」

「十香さん!?それはもっと嫌なんですが!?」
「十香ちゃんナイス!それがあったか!」
「モウヤダ……　二人同時はヤダ……。」
　狂三、二人の追撃で撃沈。
「あれま、狂三が倒れてしまったぞ。まあ別にすぐ起きるし大丈夫か。……　気を取り直して、私は夜刀神十香、第十の精霊にして剣の精霊とも呼ばれてるぞ!こっちは私の妹の夜刀神天香。識別名はプリンセスと呼ばれているのだ。天使は私は鏖殺公と呼ばれてて、天香は良くわからんが、」
「ナヘマーだ。覚えておけ姉。」
「らしいな!ちなみに琴里によればどっちもせいばぁ?で召喚されたらしい!」
　相変わらずの呑気さに苦笑いを隠せないクロエ達。すると、ふとロマニがなにかに気づいたのかコンソールを密かに叩いている。
「……　あった、これだ!どうにも精霊って言葉が引っかかったから探ってみたらビンゴ。」
「?ロマニ、何か分かったの?」
「ああ。彼女たちの総称は精霊。正式名は特殊災害指定生命体。隣界と呼ばれる世界に住まう者たちでその力はセフィロトの神々から与えられし力だとされている。そしてその力は個々が非常に強く多数では手に負えなかったらしい。最終的には和平的な解決方法で十数年前に姿を消したけど……。」
　ロマニはまるで信じられないといった顔をしている。それに納得する琴里達。
「驚くのも無理はない。」
「…　?たしかあなたは。」
　途中で割り込んで来た少女に問いかけるオルガマリー。しかしその姿は先程も見かけた姿だった。
「自己紹介がまだだった。私は元ＡＳＴ所属鳶一折紙。今は第一の精霊、または砲の精霊として君臨している。隣にいるのは私の反転体こと、」

「もうひとりの鳶一折紙です。同じく第一の精霊ですが、唯一私は天香さんみたいな反転体であり、表の私の天使は絶滅天使ですが、私は救世魔王と呼ばれる反転霊装を所持してます。」
「……　話がそれた。本来私達は精霊の力を失い、もとの日常に戻る予定だった。でも、世界の意志がこの世界が崩壊することを知り、私達に再度絶対無垢なる天使の力を分け与えた。」
「なるほど、つまりあなた達はエミヤたちと同じような者と捉えられるのね。」
「その通り。いわば天使は今で言うなら抑止力の化身とも言えるべき存在。」
「…　でもエミヤみたいに純粋な抑止力ならまだしも、折紙さんや狂三さんはあくまで分け与えられた存在であって純粋な抑止力の持ち主ではないんですよね？ではなんでこんなに簡単に……。」
　立香は疑問に思ったことを問いかける。しかし、その答えは思わぬところから飛んでくることとなる。
「それは縁だよ。」
「あっ、クロエちゃん!?」
「やーやーお待たせ、ちょっとばかし調整に手間取っちゃってね。」
　入り口に割り込んできたのは狂三達の召喚主であるクロエだった。当の本人はメイン武装である【ＨＭＢＬ】を丁寧に仕舞うと空いている席に座った。
「さて、話を戻そうか。さっき折紙ちゃんは数十年前に姿を消したって言ってたよね？」
「ああ、たしかに言っていた。」
「あれは言わば寿命による死亡。精霊という存在が完全に消滅してみんな元の人間に戻れたから急激な老化が発生してみんな即座にポックリ逝っちゃったのよ。けど今は全盛期の状態で召喚されているうえ、本当にろくな事が起きない限りは不死身になったから。」
　クロエから明かされた意外な事実に全員が息を呑んでいた。そしてその微妙な空気を更にぶち壊したのは……、
「クロエちゃーん！…　はぁ、はぁ、いつの間にかどこかに行かない

でくださいよ！……　あれ、なんで皆さんここにいるんです？」
「それはこちらのセリフよ。全員呼び出ししたはずなのになんで揃いも揃って来ないのよ？」
「ああ、多分それは私達が電子化してあっちの世界と交信していたからですね。」
「電子化？」
「ええ、私達は元は電子英霊、という肩書に収まるので有事の際以外はメインサーバーの中で活動しているんです。もちろん聖杯による受肉は果たしているんでアストルフォちゃん達みたいに下手な攻撃をくらわない限りはまったく問題はないですけどね。」
「は、はぁ……。まあいいわ、ちょうどここに来たんだし紹介していきなさい。」
「それくらいは別にいいですけども。」
　オルガマリーに触発された少女……　エジソンは服装を調節し身支度を整える。そして全員を見据えると改めて自己紹介を始めた。
「さて、新顔も居るみたいですし改めて紹介しておきますね。今宵は準グランドキャスターの冠位として召喚されたＡＬＩＣＥのスペリオルセヴン、またの名をシールドセヴンの技術畑担当。エジソン様とは私のことです！一応他にも紹介しておくと、今は引きこもってますがＡＬＩＣＥの始祖ことキャロル、原子を視るフェルミちゃん、粒子学のアイドルことクーロンちゃん。そして真理学ことフロイトちゃん。それぞれキャロルはライダー・バーサーカー、アヴェンジャー。フェルミちゃんはフォーリナー、クーロンちゃんもフォーリナーだけど、同時にルーラーとしても召喚されてて、フロイトちゃんはセイバー・フォーリナーとして呼ばれていますね。因みに現在カルデア内データベースにメインリソースの８割を用いてＡＬＩＣＥの建造を進めてます。これさえ完成すれば約６００基分のリソースをメインリソースの１割で補えるので戦力不足、及びサポート問題は解決しますね。」
「メインリソースの８割だって!?」
「ちょっと!?今ここにはほとんど施設が破壊されたカルデアしかない

のよ!?」
「ええ、重々承知ですとも。だからこそあの二人が来たのかもしれませんが。」
「・・・・・？」
　エジソンがそうボヤいていると、再び自動ドアが開いた。
「エージソーンちゃーん！終わったよー！」
「あっ！良かった！」
「・・・・？最初見たときとなんか衣装が違う気がするんだけど？」
「それは私の本来の姿ですね。あの姿はアイドル活動をするためだけの姿ですし。・・・・そんなことよりも、とりあえず当面の問題を解決すべくフェルミちゃんと共同で新たにメインリソースを建造し、現在メインリソースを担ってる炉はサブリソースとして割り振ることにしました。これにより【新造したメインリソース】の８割を用いてＡＬＩＣＥサーバーを稼働させます。これによりＡＬＩＣＥ内部からのサポートを受けられるようになります。人理が焼却されたからと言って別にデータベースも焼却されたとは限りませんから。後、同時並行でラタトスク内部データベース、及びクロエちゃんのＵＳＢ内データから隠しファイルとして発見した電子精霊のデータを発掘し修復、及び試作型ＥｖＳによる受肉誘導も終わりました。」
「隠しファイルなんてあったんだ。」
「ええ、あれから預かって解析を勧めた結果、丁寧なプロテクト、何重にも及ぶファイアウォールが掛かっているファイルがあり、強引にキャロルの権限でロックを外し確認したところ、それが見つかったので。」
「もしかしなくても君達サイバー・ネットワークでなんかしてた？」
　あまりにも複雑な文字の羅列についそう言ってしまうロマニ。それに対しエジソンが返答しようとしたがそれをクロエが制した。
「そもそもの話、ＡＬＩＣＥは仮想ネットワークサービスだったのでエジソンちゃん達にはこういう事はお茶の子さいさいなんですよ。・・・・・と言うか見逃してたけどさらっと受肉誘導って言ったよね？」

「ええ、二人の受肉誘導やりましたよ？現在生成最中でリソースの改修さえ入ればいつでも召喚できますね。」
「「「「「「……。」」」」」」
「……　呆れる行動力ね……。」
　あまりにも奇想天外予測不可能な行動により全員口から言葉が出なくなる。当然オルガマリーも言葉を失っていたが、流石に所長。いち早く復帰した。
「……　とりあえず、親睦は深めて協力できるようにはしておいて頂戴。約一週間もあれば最初の特異点が観測できるはずだから、それまで各自でトレーニングをしておきなさい。では、一時解散！」
　こうして、グランドオーダーの第一歩が始まるのだった。

……
「あれ、○○？」

「何よ、○○。」
「何でここに私達の原初の母が居るんです？」
「聞かれても知らないわよ。」
『……　いつまでも擬似じゃ可愛そうだからね。本物を渡すために呼び寄せたのよ。』
『本物？』
『第１１の霊結晶、第１３の霊結晶。これを君達に託すよ。』
「……　なんのつもりよ？」
『……　まだ姿を見せられない私に変わって、あの子達をサポートしてあげて。きっと安心してもらえるはずさ……。』

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

第１０節　開幕、オルレアン

あの自己紹介から数日が経ち、クロエたちはオルガマリーに呼び出され中央管制室に来ていた。
「さて、呼び出したのは他でもない。つい先程、第一特異点の安定化が完了した。場所はフランスのオルレアン、時代としてはあのジャンヌ・ダルクがいた時代だ。」
ロマニはタブレットから資料を取り出すとスクリーンに映し出す。
「見てのとおり、どのような状況になっているかは私達でも把握できないわ。だからこそあなた達で足を運んでもらい、原因となっている聖杯を回収してもらうわ。」
「オッケー!メンバーは決まってる?」
「ええ、立香君の方にはアルトリアオルタ、マシュ、そしてエミヤについて行ってもらうわ。」
「クロエちゃんには、取り敢えずどうなるかわからないから狂三ちゃんに天香ちゃん、そして反転折紙ちゃんに行ってもらうことにするよ。万が一戦力が足りなくなっても、マシュのシールドで呼び出せるはずだから。」
「分かったー。」
クロエが呑気に返事を返し準備をするため立香を連れて行こうとすると、それをオルガマリーが静止した。

「良い?これから行う人理修復は果てしない道のりになるわ。それでもいいのね?」
「はい!」
「ええ、もう私達は止まることは許されない。前に進むしかないんですから。」
「そう・・・・これより、カルデアは人理修復を行います。２０１７年より観測されない未来を取り戻すために、ここに、グランドオーダーの開始を発令します!!各員の健闘に期待します!!」
オルガマリーの宣言により今度こそ沸き立つ管制室。クロエもい

い顔をしてコフィンへと向かっていくのだった。

一方打って変わってシステム制御室。そこでは新規建造された発電所の管理をすべく開発に関わった【エジソン】【フェルミ】【クーロン】ことエレクトリカル三姉妹が携わっていた。キャロルやアリスたちは職員のサポートに回っているため不在である。

「さて、ようやく稼働できたわけですが……。」

「……

なんでラヴィちゃん達居ないの？」

早速問題だらけであった。保護されていたディザスターたちが全員いなくなっているのだから無理もない。現在向こう側にいるシールドセヴンの面子に捜索を依頼したエジソンだったが、ある不安を抱えていた。

（これ、どちらにしろ特異点にディザスター達が迷い込んだ可能性は否定できないよね……　はぁ……。）

そう感じたエジソンは二人に相談し、通信を繋げた。

「こちらエジソン、琴里さん応答してください！」

幾度かのコールの後、画面が灯る。

『どうしたのよ、リソースに異常でも起きた？』

「こっちのディザスターが特異点に迷い込んだ可能性が出てきたの。」

『なんですって!?……　あなたが言いたいことは大体察せたわ。』
「ええ、アリスちゃんを特異点に同行させてください。彼女なら多少なりとも対抗は可能です。」
『分かったわ。報告ありがとう。引き続き情報は集めてちょうだい。』
「それはもちろん。」

通信が切れた後、二人は机に突っ伏した。
「あーもう！厄介事ばっかりですね!!」
「落ち着いてよふたりとも～焦ったらミスっちゃうよ？」
「まあそれもそうですが…　!!」
言い合いは長く続くことになるが、後にこれが奇跡を生むことになるのは別の話。

そして、旅は始まる。
「これより、第一特異点の修復を開始する！目的地はフランス、オルレアン!!」
ロマニが短く言うだけで周囲の全員が全員目を合わせる。
「レイシフト、スタート!!」
その瞬間、クロエたちの目に映ったのは円のようなものだった。

ーーー目を開けば、そこは大自然だった。

大空の滑空中でなければ。

「また座標間違ってるぅぅ!!!!!」

「間に合わない・・・ !!」

狂三も直ぐには霊装を展開できず、天香や折紙に関しては姿すら見えない。あわや開幕終了となりかけたとき、そのクロエの手を誰かが掴んだ。

「もう全く、世話を焼かせるわね・・・。」

「あ、アリスちゃん!?」

手を掴んだのは管制室でサポートをしているはずのアリスだった。ゆっくりと速度が落ちて5人は地上に着地する。

「た、助かった・・・・。でもなんでアリスちゃんが?」

「エジちゃんからディザスターが特異点に紛れ込んでいる可能性があると連絡が来てね、回線を通じて今強引に現界している状態なの。表立ったサポートはできないけどこれくらいはね。」

「まーたディザスターちゃん脱走したの・・・・。」

「せっかく苦労して捕まえたというのに全員逃げたんですか!?」

「・・・・ 救えんな・・・・。」

「・・・・ それで、立香たちは?」

「どうやら私が介入したときにバラバラになっちゃったみたい

ね・・・・。」

アリスが行ったとおり、管制室では強引にアリスを通した為立香達とクロエたちと座標が寸断され、それぞれ別々の場所へとレイシフトしていた。

「・・・・どうするかなぁ・・・・。」

仲間とはぐれたクロエたちの前途多難な人理修復はここから始まったのであった。

Ｔｏ　ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・

第11節　わかってはいたインフレーション

「‥‥‥ひとまず現在位置を確認しなきゃね。アリスちゃん、現在地って特定できる？」
「人をＧＰＳ扱いしないでよ全く‥‥‥そこまで私も万能じゃないんだからもう‥‥‥。」
　二振りの剣を浮遊させながらアリスは周囲の地形と建物から推測を立てる。数分してようやく答えがまとまったアリスは答えを述べた。
「どうやらオルレアン城と呼ばれる地から南西の位置にいるみたい。距離もそこまで遠くないし一直線に殴ってもいいかもね。」
「ふむ‥‥‥アリスさん、オルタさんたちの場所は把握できたので？」
「ここから北東の位置‥‥‥いうなれば城下街付近にいるみたい。ロマニたちとの通信が取れればどうにかなるんだけど‥‥‥。」
「グダグダ言ってても仕方無いでしょ。取り敢えず手っ取り早く完了するためにも目標はオルレアン城で！」
「「分かった（分かりました）わ。」」
　目的地が決まった５人はひとまず当分の目的地であるオルレアン城へと足を運ぶため北東へ進路を向けるのだった‥‥‥。

一方、分断された立香達は言うとおり北東の町外れに転移してい

た。
「‥‥‥ いってて‥‥。どうなってるんだ‥‥‥ ？」
「どうも何かに弾かれたみたいだな。」
「そこまで危惧することではないが一応、警戒はしておく。」
　クロエたちと分断され覚醒した立香達だったが、人目のつかない林の入り口に一度移動し作戦会議を開くことにした。エミヤは弓を番えいつでも迎撃できるようにしており、ひとまずの安心は確保された。
「先輩、通信が回復しましたよ！」
　マシュからの報告を聞いて二人はマシュのシールドの方に目を向ける。しばらくしてノイズ音とともにロマニの顔が写った。

『やーっと繋がった!!途中で誘導シークエンスが失敗して座標を特定できなくなって‥‥‥。』
「多分、空にあるこの輪っかみたいなのの影響なのかな‥‥‥。」
『輪っか‥‥‥ ？』
「はい、先ｐ‥‥‥ マスターの言うとおり空に何らかの術式で編まれたような円が浮かんでいるんです。」
『ちょっと待ってね‥‥‥ うん、こちらからも確認した。随時こちらで解析は勧めておくよ。』
　ロマニはデータを確認すると早速簡易解析に移る。
『それでなんだが、現状クロエちゃんたちと連絡が取れないんだ。だからまずは合流を第一にしてくれ。合流が完了次第本格的に探索を始めるとしよう。』
「了解です。」
　マシュの声を最後に通信はそっけなく切れた。
「どうやら、方針は決まったみたいだな。」
　オルタが剣を鞘にしまうと出立の準備を始めた。エミヤにもこのことを伝え立香達も行動を開始するのであった。

そして再び舞台はクロエたちに映る。
オルレアン城を目指す途中、小さな町に来た。が、すでにその街は壊滅しており、まともな補給ができる状況ではなかった。

「全く……アリスちゃん、解析終わった？」
「ええ、これ、間違いなく魔力反応よ。しかもかなり濃度が濃い……つい最近、いえ、数時間前に殺されてるわ……。」
「やっぱりね…… 折紙ちゃんは救世魔王で全方位偵察を！アリスちゃんと天香ちゃんは私と一緒に迎撃スタンバイ、狂三ちゃんは先行してオルレアン城に潜って。後で寿命吸わせてあげるからとびっきり稼働時間長いやつで！」
「あらあら気前がよろしいことで…… 二言はありませんわね？」
「忘れてたら全部吸っちゃっていいよ！その代わり連鎖式に響ちゃんと白狂三ちゃん来ることになるけどね!!」
「なんか裏があると思ったらやっぱりこれですわ!?」
狂三は渋々稼働期間5年分の影を生成し先行して潜入を命じる。そして自身も長銃と短銃を両手に持ち戦闘態勢を整える。数秒後、折り紙が何かを見つけた。

「っ・・・・ 来ました！東方向より数１０！うちサーヴァント反応５！」
「ヤーッパリ残党狩りに来たね・・・・ 天香ちゃん、やっちゃえ！」
「心得た・・・・・ 終焉に沈むが良い!!【終焉の剣】よ!!!」
すでにリチャージを終えていた天香の天使がその地を穿った。衝撃波で山が割れ、その射線上にいた空飛ぶ何か・・・・・ ワイバーンが半数は吹き飛んだ。

「くっ・・・・ 突然何かと思えばいきなり宝具級の攻撃とは・・・・ おかげで貴重なバーサーク達が半数消えてしまったでは無いですか・・・・ この恨み、あなた達には死んでもらうしか無いでしょうね・・・・・。」

「・・・・ 解析完了。フランス、そしてその旗、間違いないわ。あいつは救世の聖女ことジャンヌ！多分黒いしオルタでいいでしょ！どうせ恨み言ってるしアヴェンジャー認定!!」
「・・・・ へぇ、この私を見抜くなんて。」

そう言いワイバーンの上から黒いジャンヌ・・・・ ジャンヌ・オルタが毒づいた。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・・

第12節　魔女VS悪魔

空から降ってきた厄災こと竜の魔女【ジャンヌ・オルタ(仮称)】。クロエたちは冷静に包囲し距離を詰めようとした。しかし初手の【終焉の剣】で生き残った約数基のバーサーク・サーヴァントがそれを許さない。

「‥‥ 主よ、命令を。」
「ランサーとライダーは遊撃を命じます。バーサーカーはとにかく殺し尽くしなさい。」
「御意。」
「ｕｈｈｈｈｈｈｈａ――!!!」
オルタの命令に従って三基が行動を開始する。まず最初に仕掛けたのはランサーだった。
「悪いが、ここで死んでもらうとしよう!!」
鋭利な一突きがクロエを襲うがクロエはらくらくと交わした挙げ句反撃に懐から狙撃銃を展開しフリー速射を浴びせた。ランサーもある程度距離があったので外れたがその一撃だけでクロエは今の銃の状態の解析を終えた。
「‥‥ おっけー、天香ちゃん、補正に6秒ちょうだい!」
「任せておけ!」
言うがままに天香が暴虐公を振りかざしランサーをノックバックさせた。
「くっ‥‥ パワーはどうやらそちらのほうが上のようだな。」
「暴虐公の怨讐、甘く見ないほうが良いぞ? 小童よ。」
「ほざいたことを!!」
そう言うと天香は斬撃を放った。強烈な一撃だと天香も暴走しかねないがそれ以下の出力での攻撃ならそうも行かない。牽制に打たれた黒い炎の斬撃はランサーによって切り払われるが、それで十分だった。
「おっけー、稼いだぞクロエ!」

「上等！ふぁいやー!!」
とっくに6秒は過ぎ去っていた。左右に下がった天香の真後ろにはすでに装填が済んだ狙撃銃を狙いすましたクロエの姿。ランサーはそれを発見するのに少しの時間を使ってしまう。その数秒が命取りであった。濃密な奔流がランサーの心臓を貫く。
「な・・・・ にっ!?」
「悪いね、でも、チェックメイトだよ！」
更に追撃と言わんばかりに胸部に持っていたライフルを突き刺しもう一発放つ。流石に心臓と霊核を貫かれた彼もどうしようもない様子で諦めの表情で座へと帰っていった。しかし、こちらの戦況が良くてももう三方の戦況が良いとは限らないのだ。

事実、バーサーク・バーサーカーとの戦いは熾烈を極めていた。

一方、ようやくまともな街についたマシュたち一行ははぐれサーヴァントである清姫とエリザベート・バートリー、さらにマリー・アントワネットとモーツァルトと協力体制を組み引き続き合流へと勤しんでいた。その時であった。
『藤丸君！』
「は、はい!!」
『前方よりサーヴァント反応3及び5！うち多い方は合流目的だった

クロエたちだ!!』
「っ!?距離は！」
『５ｋｍといったところかな!!』
「っ、遠すぎる!!」
この距離ではまともな射撃援護も出来ない。とはいえ遠距離攻撃手段を持つサーヴァントが藤丸たちの中にいるわけでもなかった。
このままでは埒が明かない。そんな時だった。

ーーなら、ぼくたちのでばんだね！ーー

「っ!?・・・・今の声。」
「私じゃありませんよ？マスター。」
「僕も違うね。」
「嘘は言いませんけど流石に私でもないですし。」
「じゃあ一体・・・・？」
謎の声に戸惑う一行。しかしその声の正体は後で分かることになる。

そして場面は戻る。

残るバーサークは２体。そして首領のオルタ。現在折紙がオルタを抑えているものの戦況は思わしくない。というのも残り２体は相

性が悪いのだ。
「硬いですことっ！」
長銃と短銃から弾丸を放ち続ける狂三だが相対するバーサーク・ライダーは近接主体で見切り能力がある上、それに従える亀のようなドラゴンがいるためなかなか表立ったダメージが通らないのだ。
残党狩りからの遭遇戦は佳境を迎える……！！

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……。

第13節　復讐者は闇に舞う

銃撃音と打撃音が飛び交う戦闘空域。何度もリロードしていた狂三だったが霊力と自身の時間が切れてきたのか既に息が詰まっていた。

「はぁ・・・　はぁ・・・　これだけ一点集中しても・・・・　ダメージを与えられないのはおかしいですわよ・・・・　？」

「ハハハハハハ!!!!!!バーサーク・ライダーの使うタラスクは魔力を与えれば与えるほど装甲は固くなるのよ!!その様子を見る限りもう息切れみたいね？」

「何を言いますか!!だったらこっちも第一の切り札を使うまででしてよ!!」

狂三は影を伸ばして街全体を覆っていく。周囲にいた取り巻きのスケルトンがどんどん倒れていき、バーサーク・バーサーカーと戦っていた立香達も少しばかり膝をついた。

「な、何・・・・　これ・・・・　！」

「少しばかり、時間をもらいますわよ!!【四の弾】！」

吸い上げた時間を使って弾を生成し自らの負傷を治療した狂三は弾切れしていたライフルを軒並みリロードした。尚これで先程吸った時間の殆どを使い果たしてしまっているのだが。クロエは一旦下がり同じくバーサーク・バーサーカーと対峙する折紙の元へ来た。

「折紙ちゃん、残りの霊力はどれくらい残ってる？」

「さっきまでオルタさんを抑えるのに全力でしたから・・・・　多く見積もっても3割かな・・・・。」

「・・・・・・　あいつを呼ぶか!!時間を稼いでくれ!!」

「分かりました!!」

アイツですべてを察した折紙は再び浮遊するとビットをすべて展開し一点に集中させる。

「【王冠】っ！これで落ちてっ!!」

残りの全霊力を持って放たれた極太のレーザーはバーサーカーに直撃はせずとも獲物を吹き飛ばし直接的な攻撃手段を奪った。だが、

折紙も霊力切れでもう動けない。
「チィッ……　お願いだから早く気づいてよ……　!!」
　クロエとて自衛能力がないわけでもない。立香たちの援護もある中、バーサーカーは見向きもせずこちらに向かってくるあたり相当あの【王冠】を脅威と認定したらしい。そこらへんにあった棒を新たな獲物としてこちらへと向かってきていた。同時に狂三も流石に息切れのようで完全に背中合わせだった。
「あっはっははは!!!どれほど早かろうと!!どれほど強かろうと!!私の前には無力なのよ!!!さっさと焼かれてしまいなさい!!まあ、かわせたとしてもどこまで反応できるかだけど!!」

『……　早い？今自分の方が速いって言ったよね？』
『……　もう、呼び出すのが遅いんだから～！』
「全く、遅いよふたりとも!!」
「……　なるほど、たしかにこの二人は最大の戦力だね…。」
　アリスに頼んで書いてもらった方陣から出てきたのはアストルフォと見慣れない銀髪の少女。しかしこの少女について、クロエは面

識があった。
「あなたの事だからね、煽てれば速いと煽ってくるって踏んだから方陣にスピーカー制御を入れておいて正解だったよ。」
「ボクより速いサーヴァントがいるのは我慢ならないからね。」
　全身が黒い体で覆われかろうじて顔だけがまともな感じの少女。対してアストルフォはカリゴランテの剣を素振りしており準備は万全なようだ。

「敵のいない地まで撤退するからそれまでの時間稼ぎ！出来る？」
「お安い御用さ。その代わりあっちに戻ったら存分に甘えさせてね？」
「そりゃもちろんいいよ！何だったら全員倒してくれたらいくらでもひっついてていいとも！」
「っ!?」
　クロエの軽率なこの発言が彼女とアストルフォのエンジンに火をつけた。
「さて・・・・　三人共、それと立香ちゃんたちも！一旦近くの街まで後退するよ!!」
「で、ですがここで戦力を減らしておいたほうが・・・・・　!!」
「死にたくなかったら下がるのよ!!!どうせ敵の本拠地は目の前！ならば今は戦力を整えて一斉に乗り込む方がいいわ!!だよね、琴里ちゃん！」
『ええ、少なくとも今は彼女の言うとおりよ。すでに半数のサーヴァントを撃墜できた今我々は十分な戦力を保持したままここまで来れてるわ。なら一旦下がって休憩したほうが後々のためにもなる。』
「そういう事だからドクター!!安全な街までの撤退経路を出して!!」
　ドクターは示し合わせたかのように付近の地理図を出し一番最適な経路を示しだした。この場を二人に任せても大丈夫だと判断したクロエは真っ先に狂三をおぶり撤退の準備を始めていた。アリスも折紙を抱え下がる準備はできている。その後ろには天香が二人を守るように構えておりいつ来てもいいような状態だった。

「立香、判断を謝れば世界は滅ぶのよ!!」
「……　分かった、いったんさがろう！」
　立香も決心したので全員が経路を辿って撤退していく。オルタは容赦なく追撃の指示を出そうとしたがやはり天香やアストルフォ、そして両腕に剣を構えた少女が追撃を許すはずもない。
「くっ……。」
　ここまで計画が狂わされたことにジャンヌは歯軋りをするのだった。
　Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……